

小・中学校

平成12年度

教育研究員研究報告書

書 写

東京都教育委員会

平成12年度教育研究員名簿

	地 区	学 校 名	名 前
◎	文 京	誠 之 小 学 校	高 島 一 広
	目 黒	東 山 小 学 校	栗 林 扶海代
	足 立	五 反 野 小 学 校	玉 置 克 也
	東久留米	南 町 小 学 校	鳥 海 眞由美
	稲 城	稲 城 第 八 小 学 校	中 村 照 子
	板 橋	板 橋 第 五 中 学 校	秋 庭 加惠手
	江戸川	春 江 中 学 校	杉 澤 美智子
○	立 川	立 川 第 八 中 学 校	田 村 浩 実

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都立教育研究所指導主事 鈕 持 勉

目 次

I	研究主題について	2
1	主題設定の理由	2
2	研究のねらい	2
3	研究全体構想図	3
II	研究の内容	4
1	学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする	4
2	方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組む	5
3	学習の成果を確認し、次の学習に生かす	6
4	書写で学んだことを、日常生活に生かす	7
III	実践研究	8
	<小学校第5学年の学習指導>	
1	単元名	8
2	単元の目標	8
3	単元設定の理由	8
4	児童の実態	8
5	研究主題との関連－学習指導の工夫	8
6	単元の学習計画	9
7	本時の学習活動	9
8	本時の考察	11
	<小学校第2学年の学習指導>	
1	単元名	12
2	単元の目標	12
3	単元設定の理由	12
4	児童の実態	13
5	研究主題との関連－学習指導の工夫	13
6	単元の学習計画	14
7	本時の学習活動	14
8	本時の考察	16
	<中学校第1学年の学習指導>	
1	単元名	17
2	単元の目標	17
3	単元設定の理由	17
4	生徒の実態	17
5	研究主題との関連－学習指導の工夫	18
6	単元の学習計画	19
7	本時の学習活動	19
8	本時の考察	21
IV	研究のまとめと今後の課題	23

研究主題 一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習

I 研究主題について

1 主題設定の理由

新学習指導要領が告示され本年度から移行措置期間となった。新学習指導要領では、児童・生徒の課題解決能力を高め、「生きる力」をはぐくむこととともに、各教科における基礎・基本を徹底することが求められている。

国語科では、目標に「伝え合う力を高める」ことが明記され、児童・生徒の意思伝達能力の育成がいままで以上に強調された。

書写は「書くこと」の領域と密接に関連し、国語科の目指す「適切に表現する能力」「思考力」「言語感覚」「国語科に対する関心」「国語を尊重する態度」等を育成するための基礎・基本となる。また、伝え合う力を高めるために「相手を意識した伝達性の高い整った文字を書くこと」「場や用途に合わせて文字の大きさや配列、字配りを考えて書くこと」ができる能力・態度の育成をねらいとしている。

これらのことを踏まえ、書写の学習活動においては、児童・生徒が自らの課題や学習方法を選択・決定し、課題解決学習を進めていく中で「自ら学び考える力」を伸ばし、生涯学習の基礎となる「学び方」を学ぶ場としていく必要があると考える。

以上のことから、本年度の研究主題を『一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習』とし、研究を進めることにした。

2 研究のねらい

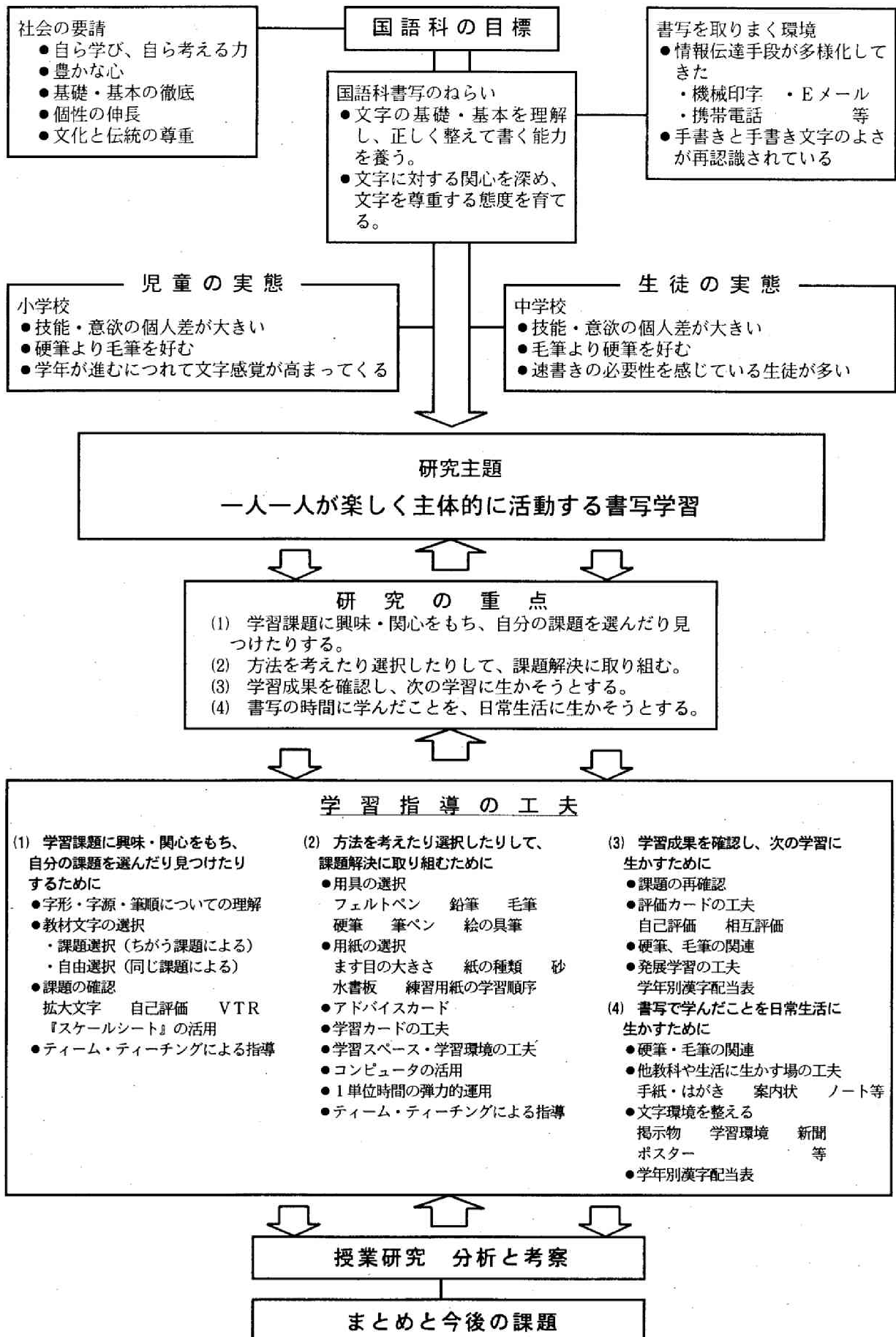
児童・生徒が楽しく主体的に学習するためには、一人一人が学習内容を自分のものとしてとらえ、自分の学習課題・学習方法等を選択・決定し、進んで学習を進めていけるように支援していくことが重要になってくる。

このことを前提に書写における課題解決の過程を以下のように考えた。

- (1) 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。
- (2) 方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組む。
- (3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。
- (4) 書写の時間に学んだことを日常生活に生かそうとする。

以上のようなことから本年度の研究の重点を学習課題・学習方法の選択におき、主に(1)(2)を中心に研究を進めることによって『一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習』の実現を目指すことにした。

3 研究全体構想図



II 研究の内容

1 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする

児童・生徒が文字を書くことに意欲的に取り組み、効果的な書写学習を行うためには学習課題に対してどのくらい興味・関心をもてるかということにかかっている。しかし、これまでの与えられた教材文字を黙々と練習するという方法では、興味・関心や意欲を引き出すことは容易ではなかった。これを踏まえて、私たちは児童・生徒が自ら課題を選択し、意欲的に学習に取り組めるように、以下の点について工夫した。

(1) 字形・字源・筆順についての理解

- ア 点画の長短、方向、曲直、画と画との間、接し方、交わり方を分かりやすく解説する。
- イ 漢字が単独文字から複合文字の部分となるときは字形が変化することを学習させる。
- ウ 文字を書き上げた全体の形は単純な図形で示すことができることを確認させる。
- エ 平仮名や片仮名の字源となる漢字を提示し、正しく整った文字を書くための動機づけとする。
- オ 児童・生徒と向かい合って空書きすることで、正しい筆順を確認させる。この場合、教師は左手で児童・生徒の見た書き順に合わせて画数を言いながら空書きする。

(2) 教材文字の選択

ア 課題選択（違う課題による）

		学 習 段 階	課 題 選 択
小 学 校	低学年	硬筆で平仮名・片仮名・漢字の基本を学習する	1年 複数課題の提示は難しい 2年 類似性のある教材文字から選択
	中学年	毛筆学習導入 文字の組立て、字形、配列に注意する	基本運筆の定着を図るため、難易度の違う教材文字を複数提示
	高学年	大きさ、配列、字配りに注意して読みやすく書く	各課題別に複数ずつ提示 毛筆は中心線や左右の調和の難易度が違うものを複数提示
中 学 校		行書学習導入 目的や必要に応じて調和よく速く書く	導入段階では楷書か行書かの選択も可能 行書の点画の何を練習するかを選択

イ 自由選択（同じ課題による）

小 学 校	低学年	1年 自由選択は難しい 2年 用具の選択が可能 課題についても平易なものから始める
	中学年	硬筆について可能、毛筆についても組立て方の選択が可能である
	高学年	練習方法、教材文字、めあてについて選択の幅を増やす
中 学 校		練習方法、練習用紙、教材文字など様々な組合せの中から選択する

(3) 課題の確認

- ア 水書板や画用紙などに拡大文字を提示し、各点画の書き方の要点や上下左右のバランスと中心線を確認させる。
- イ 教師の示範の筆使いをVTRで提示し、反復したりスローモーションを利用したりすることで、筆順の確認と教材文字の課題を明確にする。
- ウ 最初に試し書きをし、次に試し書きと教材文字を比較して ペンで気付いたことを試し書きに○・△・文字で記入していく自己評価を行う。
- エ 教科書の大きさに合わせた透明シートや半紙で、縦六等分・横半分（または上下2センチを折って残りを四等分）の線を赤でなぞった『スケールシート』を作成し、問題を確認して自己評価を容易にできるようにする。

(4) ティーム・ティーチングによる指導

- ア 一人は指導・助言、一人は用具や機器の操作というように役割を分担して、個々の教師が多様な学習展開をし、時間を有効に活用する。
- イ 課題を理解するために支援を要する児童・生徒への対応を適宜行う。
- ウ 自己評価の観点が見いだせない児童・生徒への適切な支援を行う。
- エ 個別に対応することで、児童・生徒の興味・関心が持続し、楽しく学習していけるような授業の展開を考える。
- オ 個別に対応することで、課題を示唆し本人の気づきを促すような支援をする。
- カ 机間指導する際には二人が同じような経路をとらず、学級全体に目を配るよう留意する。

2 方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組む

学習方法も様々に選択できるように提示することで、児童・生徒の意欲を引き出し、楽しく主体的に活動する授業が展開できる。そのために、次のことについて工夫した。

(1) 用具の選択

- ア 書く用紙や目的に合わせて、穂先の大小が違うフェルトペンや筆ペン、絵の具筆、ボールペンなどからも選択する。

(2) 用紙の選択

- ア 発達段階にあったます目を工夫し、複数提示して児童・生徒が選択できるようにする。この場合、小学校低学年だからといって大きくしすぎないことに留意する。
- イ 用紙についても柔軟に考え、和紙、上質紙、リサイクル紙、更紙、画用紙などを用意し、児童・生徒に選択の余地を与えるような提示をしてもよい。
- ウ 箱に砂を入れて指文字を書いたり、粘土で文字を作ったり、水書板で自由に書くなど工夫すれば楽しい授業となる。



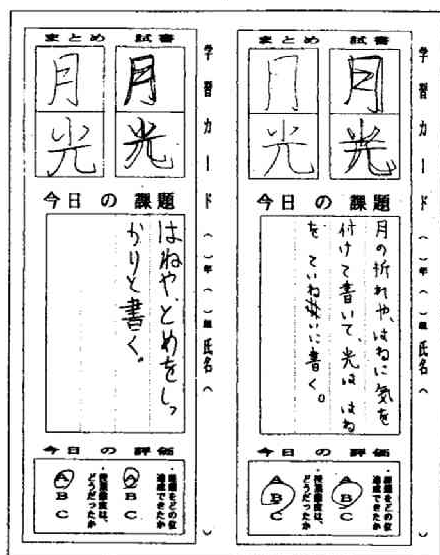
籠字の練習用紙

エ 課題を示して書く空間も指定する。

例：籠字、始筆・終筆のみの表示、中心線のみの表示など

難易度をつけて学習用紙を提示するが、必ずしも順序どおり書くように指定せず、児童・生徒に自由に学習順序を選択できるようにする。

(3) 学習カードの工夫



ア 学習カードに、授業最初の「試し書き」の欄と授業最後の「まとめ書き」の欄を作り、その授業の中での練習の成果を確認する。

イ 「試し書き」は自己評価するので、ある程度まず目は大きくする。

ウ 高学年になれば、自己評価したものから自分の課題を見つけて記入する欄を作り、練習の目安とすることができる。

エ 授業の最後に「まとめ書き」と「試し書き」とを比べてどの程度課題を達成できたかという観点で自己評価する欄を設ける。

オ その他、授業中の各活動についても自己評価するとよい。

カ 硬筆と毛筆の関連指導のため、硬筆の練習用紙として活用する。

(4) その他

ア 学習スペース・学習環境の工夫

(ア) 児童・生徒が楽しく活動できるよう、水書板コーナーや絵の具筆コーナーなど様々な用具を周囲に設置する。

(イ) 選択した課題別に机を配列し、支援を特に必要とする児童・生徒の机の配置を工夫する。

(ウ) 様々な教育機器や用具設置コーナーが置ける広めの教室を確保する。チーム・ティーチングで指導する場合は、二教室を利用するとより効果があがる。

イ コンピュータの活用

(ア) 筆順や文字検索、部首検索などに利用する。

ウ 一単位時間の弾力的運用

(ア) 低学年の児童について、意欲の持続を考慮し30分授業の展開が効果的な場合もあり、各単元、児童・生徒の発達段階に合わせて弾力的に学習時間を運用する。

3 学習の成果を確認し、次の学習に生かすために

その日学習したことを様々な角度から評価し、成就感や達成感をもち、新たな課題意識をもつことによって、次の学習につなげていくという流れができあがって、初めて書写学習が生きてくる。そのためには次のことに注意する必要がある。

(1) 課題の再確認

ア 本時の課題がどういうものであったか、教科書・黒板・学習カードなどで再度確認する。

イ 自己評価を見直し、課題をよくとらえていたかを確認する。

(2) 評価カードの工夫

ア 自己評価

- (7) 自分の課題に照らし合わせて、まとめ書きを自己評価する。低学年においては評価しやすいように視覚的に観点を表示する。

イ 相互評価

- (7) 友達のよい点や課題が達成できた成就感が得られるような相互評価をする。
- (4) 課題に対する取り組み方への評価が、次時への意欲を引き出せるものとなるよう助言する。

ウ 形成的評価

- (7) 学習の途中で課題ごとに評価ができる欄を設け、シールなどで本人と教師が評価をつけることによって児童・生徒の課題意識を持続できるようにする。

エ 教師の評価

- (7) 到達度評価を基本とするが、学習に対する成就感が得られるような評価と助言を与える。
- (4) 努力を要する課題についても明確に示し、次の学習への意欲がわくように助言する。

(3) 発展学習の工夫

- ア 毛筆で練習した文字を、その時間内に硬筆で練習することによって、毛筆で学習したことを硬筆でも生かせるようにする。

- イ 学年別漢字配当表を使って、その日の課題を含む文字を見つける学習をする。

- ウ 目的や意図するものにより、適切に用具や用紙を選択しながら、書写で学んだことが他の学習や活動に生かせるよう継続的に指導する。

4 書写で学んだことを、日常生活に生かすために

伝え合う力を伸ばすためには、相手を意識した表記を心がけることが大切である。そのためには、書写で学習したことを授業だけのものとせず、文字を速く整えて書く能力を生かしながら、目的に合わせ相手を意識した書写活動を日常生活の中で行わなければならない。

(1) 硬筆・毛筆の関連指導

- ア 毛筆で学習したことを毛筆だけのものとせず、硬筆でも意識して書くような心がけが身に付くよう指導する。

(2) 他教科や生活に生かすための工夫

- ア 授業ノートに書写で学んだことを生かして、速く整えて書くようにする。
- イ 手紙やはがきも、相手を意識した文字で、用具も適切に選択して書くことを身に付ける。
- ウ 学校行事の案内状などにも、用具を適切に選択し相手を意識して書くようにする。

(3) 文字環境を整える

- ア 教室や廊下の掲示物、新聞やポスターなどの印刷物等で様々な文字を知り、常に自分の書くものと比較しながら、自分の書写活動にも生かせるような文字感覚を高めていくようにする。
- イ 自分で掲示物や印刷物を作る機会を多く設け、文字の伝達性について意識できるような環境を整える。

Ⅲ 実践研究

〈小学校第5学年の学習指導例〉

1 単元名 文字の組立て方(一)

2 単元の目標

- (1) 文字の左右の組立て方を正しく理解する。
- (2) 「へん」や「つくり」になると、点画や字形が変化することがあることを理解して書く。
- (3) 「へん」と「つくり」の幅のとり方や高さに気を付けて、字形を整えて書く。

3 単元設定の理由

漢字の文字の組立てについては、毛筆書写では初めてであるが、硬筆ではすでに第3学年から学習しており、左右の部分の組立て方、第4学年では上下の組立て方についても学習している。これらの複合文字は、単独文字をただ小さくして、左右あるいは上下に並べればよいものではなく、一つのまとまりある形として見えるように書かなければならない。そのためには部分の形をはじめ、部分部分の大きさや、位置関係にも目を向けていく必要がある。しかし、実際には、これらに対する意識は低く、あまり理解されていないのが実情である。

この単元では、部分と部分が左右に並ぶ「へん」と「つくり」について、相互がゆずり合う関係になっていることを理解し、左右の組立てに気を付けながら文字を整えて書くことをねらいとしている。

4 児童の実態

本学級の左右の組立てからなる文字の実態は、

- (1) 左右が同じ幅の文字(例『材』)、左側が狭い文字(例『地』)、右側が狭い文字(例『引』)のどれも左右の幅を同じに書く。
- (2) 「へん」の幅が狭くならず、単独文字と同じ幅に書く。
- (3) 木へんでは、「へん」の最終画が変化していない。
- (4) 左右のゆずり合いが見られず、単独文字が2文字並んでいるように見える。

といった児童が多い。

前時『木材』の学習では、「へん」や「つくり」の幅が狭くなること、「木へん」の4画目が変化すること、「つくり」の1画目は「へん」の1画目より下から書き出すことなどを学習したが、学習カードに書いた目当ては「字をきれいに書く」「字を整えて書く」等が多く、左右の組立てにかかわる目当てがなかなかもてなかった。その結果、まとめ書きでの文字も左右の組立てを意識したものが少なかった。

そこで、本時では、もう一度左右の組立てからなる文字を取り上げ、「へん」の形や大きさに気を付けることを目当てにもつことで整った字を書くことができるようにしようと考えた。

5 研究主題との関連—学習指導の工夫

- (1) 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 教材文字の選択

本単元では、児童が主体的に学習できるようにするため、教材文字を課題別で選ばせた。

『地』『灯』のどちらも「へん」と「つくり」からなるが、『地』は「へん」が狭く、

「へん」の最終画が「はらう」文字であり、『灯』は「へん」と「つくり」の幅が同じでへんの最終画を短く「とめる」文字である。この2つの文字から児童が、自分の課題や思いにあわせて、教材文字を選択できるようにした。

(2) 方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組む。

ア 学習スペースの工夫及びチーム・ティーチングによる指導

本学習では、児童の課題文字をあらかじめ把握しておき、座席を窓側に『土地』を選択した児童、廊下側に『灯火』を選択した児童とし、指導者が課題別に支援グループを分担した。これにより、教師は児童の課題把握の状況が明確に分かるとともに、児童相互の教え合い、学び合いができると考えた。

(3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。

ア 学年別漢字配当表の活用

第4学年で学習する漢字配当表から左右の組立てからなる字を見つけさせ、本単元で学習したことを、他の文字でも生かして整った文字が書けるようにした。

6 単元の学習計画（3時間扱い）

(1) 「木」と「木へん」の違いに気を付けて『木材』を書くことができる。（1時間）

(2) 「へん」と「つくり」の大きさに気を付けて、字形を整えて書くことができる。（2時間）

7 本時の学習活動（2/3）

(1) 教材 文字の組立て方（一） 『土地』 『灯火』

(2) 目標

ア 左右の組立て方を正しく理解することができる。

イ 左右の組立て方に気を付けて、文字を整えて書くことができる。

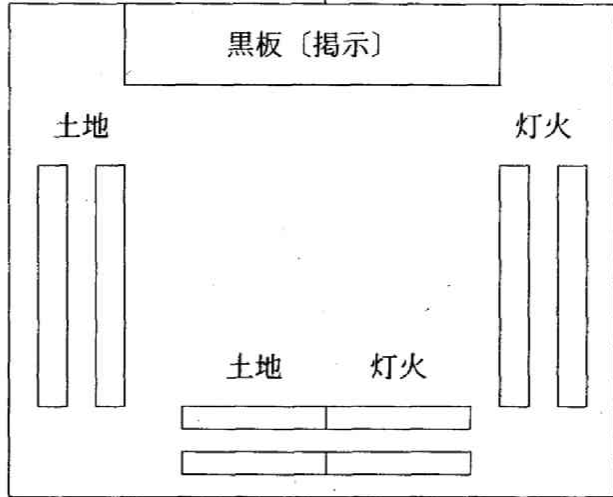
(3) 展開

学習活動と内容	(T ₁)	支 援 (T ₂)	資料・教具
<p>1 試書する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●教材文字を知り、空書きをして筆順を確認する。 『土地』 『灯火』 ●学習カードに自分の選んだ教材を硬筆で試書する。 <p>2 共通の課題をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●前時で学習した『木材』を例にして課題を理解し、各自の課題を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●教材文字を知らせる。 ●空書きをする。 ●『土地』と『灯火』のどちらを選んだか把握しておく。 ●『木材』を例にして左右の組立てからなる文字の課題を見つけることができるようにする。 ●課題例 <ul style="list-style-type: none"> ○『灯』の「へん」の4画目はとめる ○『地』の「へん」は狭く書く 	<ul style="list-style-type: none"> ●机間指導しながら、大きく空書きするように助言する。 ●学習カードを配る。 ●学習課題を書いた紙を貼る。 	<p>拡大手本 『土地』 『灯火』</p> <p>学習カード</p> <p>学習課題の用紙</p>

○『地』の「へん」の3画目は右上にはらう

2つの部分の組立て方に注意して書こう

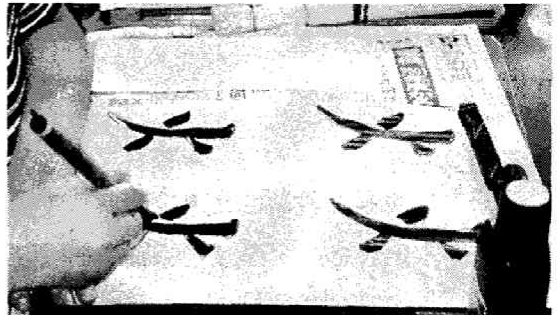
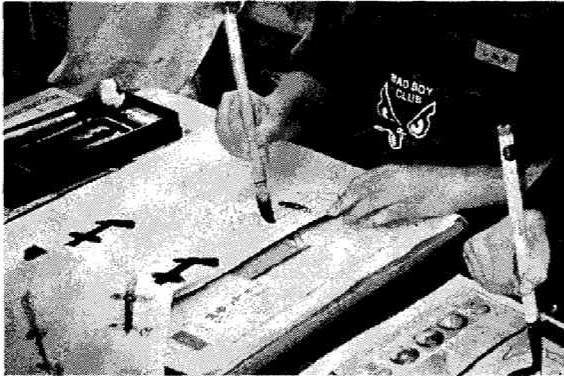
- 題材により2つのグループに分かれる。
 - 『土地』は窓側、『灯火』は廊下側に分かれる。
- 『土地』15人
『灯火』16人



- 自分の課題を学習カードに記入する。
- 3 練習する。
- 毛筆を使い、自分の選んだ教材を試書する。

- 主に廊下側の児童が自分の課題を適切に書けているか、机間指導しながら助言する。
- 『土地』を選んだ児童を支援する。

- 主に窓側の児童が自分の課題を適切に書けているか、机間指導しながら助言する。
- 『灯火』を選んだ児童を支援する。



- 練習用紙を使い、練習する。
- 4 まとめる。
- 学習カードに自分の課題を硬筆を使ってまとめ書きをする。
- 5 評価する。

- 筆使いに慣れていない児童には、直接手をそえて一緒に書いて感覚をつかめるようにする。
- T₁ と T₂ が担当を交代する。
- 今までの練習を生かして正しい姿勢や筆の持ち方で書くように促す。
- 各自の課題にそって評価できているか確認して

練習用紙
土地
①②③
灯火
①②③
文字カード

<ul style="list-style-type: none"> ●学習カードに◎、○、△で評価を記入する。 <p>6 『材』と同じように左右の組立てからなる文字を見つける。</p> <p>7 次時の予告を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●次時は『湖岸』を学習することを知らせる。 	<p>まわり、必要に応じて助言する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第4学年で学習する漢字配当表から左右の組立てからなる漢字を見つけさせ意識を高めるようにする。 ●次時は『湖岸』を学習することを児童に告げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●予めいくつかの文字を用意しておき、児童の発表に合わせて掲示する。 ●拡大手本を示し、次時への意欲化を図る。 	<p>拡大手本『湖岸』</p>
---	---	---	-----------------

(4) 評価

- 左右の組立てからなる文字では「へん」「つくり」の幅が単独文字から変化することを理解できたか。
- 「へん」の幅や最終画の変化に気を付けて、文字を書くことができたか。

8 本時の考察

(1) 学習課題に興味・関心を持ち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 教材文字の選択

児童は、文字による課題の違いを理解して選択をしていたが、「学習のめあて」には、「バランスよく書く」「ていねいに書く」等の記述も多くみられた。教師の助言により大部分が具体的な課題に変更できた。また、自分が課題を選んだことにより、意欲的に活動に取り組むことができた。

(2) 方法を考えたり、選択したりして課題解決に取り組む。

ア 学習スペース、チーム・ティーチング

同じ課題の児童がまとまっていたことにより、友達同士での教え合いや相互評価等がみられた。特に、練習用紙を使った活動では、教師側も助言しやすかった。また、途中担当を交代することにより複数の教師から支援や称賛を受けられたことで意欲の高まりにつながった。

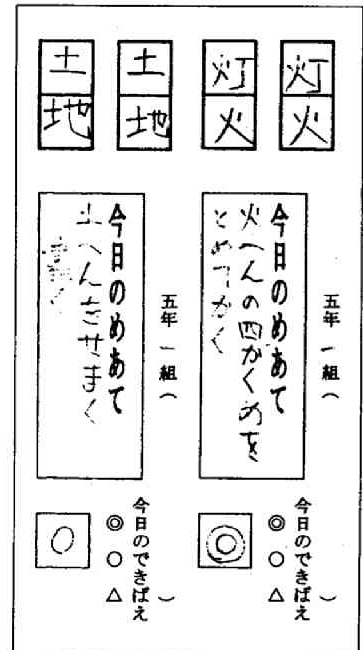
(3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。

ア 学年別漢字配当表の活用

児童は教材文字以外にも左右の組立てからなる文字があることを意識することができ、ふだんの学習の中でも「へん」や「つくり」に気を付けて文字を書くことに注意を払うようになった。

(4) その他

練習用紙について、今回の授業では学習の順序選択を考えていなかったが、児童の思いや必要に応じて練習する順序や内容についても選択させることができると考える。



〈小学校第2学年の学習指導例〉

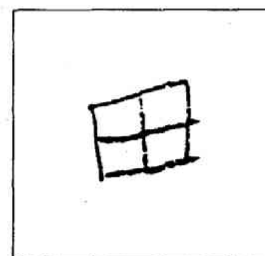
1 単元名 画のつけ方・交わり方

2 単元の目標

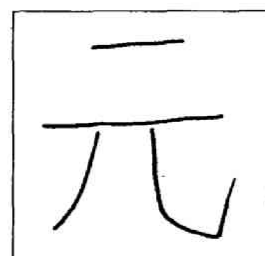
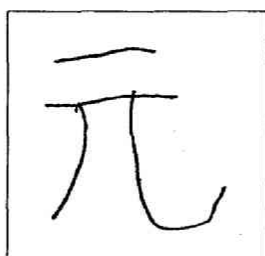
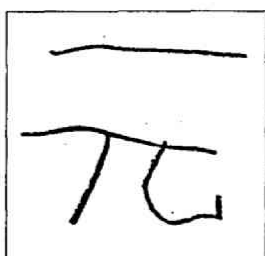
- (1) 画のつけ方・交わり方の「つく」「交わる」の意味を知る。
- (2) 画のつけ方・交わり方に気を付けて、文字を書けるようにする。

3 単元設定の理由

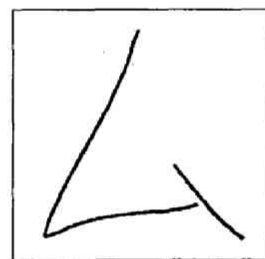
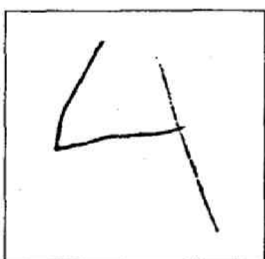
点画と点画をつけるのか交わらせるのかということは、文字を正しく書くことに深く関係している。例えば、漢字の「工」と「土」、「刀」と「力」、カタカナの「ス」や「ヌ」などは点画をつけるか交わらせるかで全く違う字になってしまう。ところが児童の書く文字には次のような実態が見られる。



さらに、つく点画が多くなればなるほど、児童にとっての難易度は高くなっていく。



そして、文字の筆順によってはすでに書いた点画に、後から接するように書かなければならない文字もある。例えば漢字の「入」、カタカナの「マ」「ム」「ア」といった文字である。後から接するとなるとさらに困難さが増すといえよう。



また、低学年が硬筆の筆記用具として多く使用する鉛筆は、先が細く、注意しなければすぐに点画からはみ出してしまう。正しく書き分けなければ違う文字になってしまうということを知り、それがきちんとできるようになることは「文字を正しく整えて書けるようにする」という書写の目当てからも大切な課題である。

そして、点画と点画とをつけるか、交わらせるかということに注意しながら文字を書くことで、丁寧な文字を書く態度の育成につながるものと考えた。

4 児童の実態

本学級の画のつけ方、交わり方にかかわる文字の実態は、次の通りである。

技能面からみると、つくところを交わらせて書いたり、(正、月、日、見等)書き順を誤ったりしている児童が少なくない。(上、右、左、石等)

意欲面からみると、「つく、交わる」を特に意識しないで書くこともあり、字が雑になりがちな児童がいる。

5 研究主題との関連—学習指導の工夫

(1) 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 教材文字の精選

『工』、『土』のようにつく、交わるがはっきりしていて理解しやすい文字を単元の初めの学習に選び、児童の実態や、習熟度に合わせて、教材文字を易から難へと進めていった。

イ 児童による選択の場の設定

自分なりの選択理由で文字を選んだり、絵の具筆か粘土かの用具の選択を考えた。

(2) 方法を考えたり、選択したりして課題解決に取り組む。

ア 筆記用具の工夫

絵の具筆を使って、一画ごとに色を変えて書いたり、粘土を使って文字を作ったりして、楽しく取り組めるようにした。

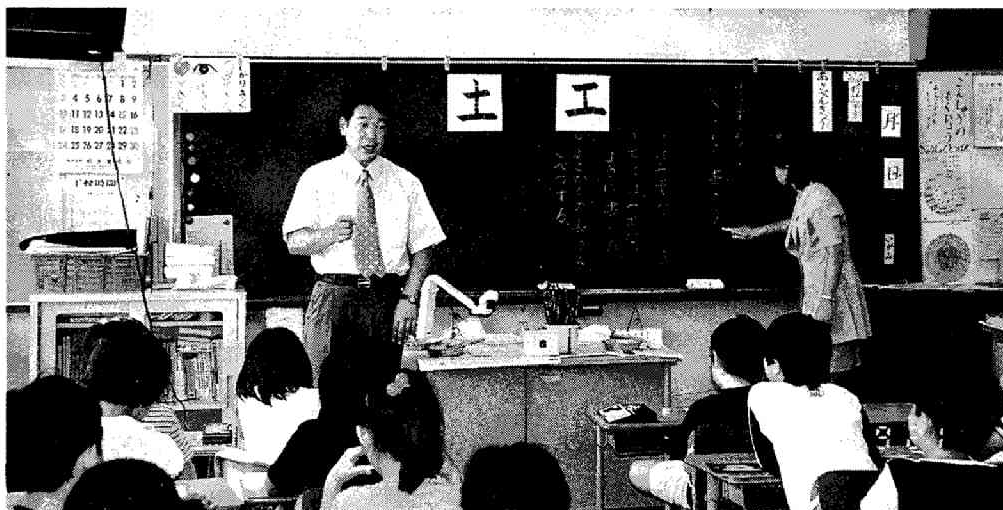
イ ティーム・ティーチングによる指導

用具の種類で指導を分担したり、発問、指名と板書を分担したり、役割を交代したりして授業にアクセントをつけた。そのことで児童が集中して学習できるようにした。また、学習方法で分担を決め、学習の効率化を図った。

(3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。

ア 評価カードの工夫

予め、児童に2種類のシール(赤シールは「もっと書きたい」、青シールは「大体満足」)を持たせることで、学習意欲が高められた。『工』『土』『石』『右』の4文字の練習とまとめ書きの8箇所、学習を進めながらそのつど子どもたちは評価した。



6 単元の学習計画（3時間）

- (1) 画と画とがつくところと交わるところを絵の具や粘土を使って気付き、正しく書けるようにする。
- (2) 画と画とのつくところ、交わるところを区別して書けるようにする。
- (3) 画と画とがつくところ、はなれるところを区別して書けるようにする。

7 本時の学習活動（1/3時）

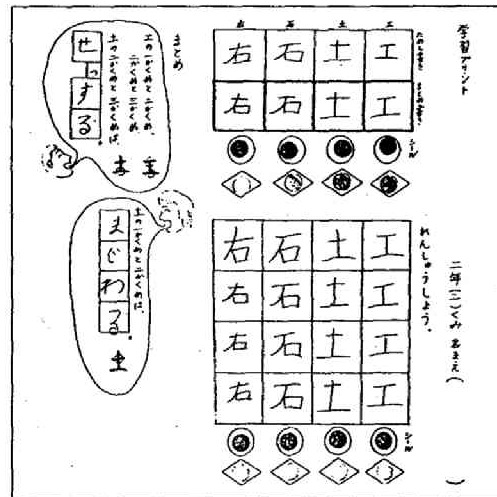
(1) 教材 画と画とのつけ方交わり方 『工』『土』『石』『右』

(2) 目標

- ア 画と画とをつける・交わるということに気付く。
- イ つける・交わることを意識して文字を正しく書く。

(3) 展開

学習活動と内容	(T ₁)	支 援 (T ₂)	資料・教具
<p>1 試書をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●『工』『土』を試書する。 ●どんな点に気をつけて書いたかを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●教材文字を知らせ、空書き指導をする。 ●意見を聞き、まとめる。 ●つく・交わることを正しく書かないと、違う漢字になってしまうことを見つげられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習プリントを配り空書き指導をする。 ●意見を板書する。 	<p>拡大文字 学習プリント <u>OHC</u></p>
<p>「つく・交わる」に気を付けて『工』『土』を書こう。</p>			
<p>2 『工』『土』を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●つく、交わることを意識して、『工』『土』を練習する。 ●まとめ書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●書き順や、つく・交わることを意識できるように、声かけをする。 	<p>シールを貼りながら、評価を行う。</p>	



つくところ・交わるところを、粘土や絵の具を使って、発見しよう。

3 選択する。

- 絵の具筆・粘土をつかって『石』『右』を書いたり、作ったりする。
- つく・交わるということの理解を深める。

- 進んで選択できるように提示する。

- ①文字『石』か『右』
- ②道具「絵の具筆」「粘土」

- 絵の具筆グループを指導する。(色々な色を選んで絵を描くときのように字を書く。)

- 粘土グループを指導する。(粘土を細長くして文字を作る。)

拡大文字
粘土
絵の具筆



4 『石』『右』を書く。

- 『石』『右』を練習し、まとめ書きをする。

5 学習のまとめをする。

- 分かったことを学習プリントに書く。

6 評価する。

- 学習プリントにシールを貼る。

7 次時の学習内容を聞き、意欲をもつ。

- 文字や、道具を変えてもよいことを伝える。

- 「つく・交わる」を意識して正しい文字を書けるように助言する。

- 書き順や、つく、交わることを意識できるように声かけをする。

- つく、交わることに注目できるように、まとめのヒントを与えながら声かけをする。

- 今日の学習(つく・交わる)で分かったことを確かめられようにする。

- 児童の学習プリントにシールを貼る。

- 『正』『茶』等を学習することを告げる。

- 『正』『茶』の文字を提示する。

シール

(4) 評価

- ア 「つく・交わる」に関心をもって、筆記用具や練習文字の選択を行い、学習に意欲をもつことができたか。
- イ いろいろな道具で、文字の交わる場所・つくところを進んで調べることができたか。
- ウ 「つく・交わる」ことを意識して正しい文字を書くことができたか。

8 本時の考察

(1) 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 教材文字の精選

工、土を導入段階で用いることで、「つく」「交わる」の言葉は出なかったが、「突き抜ける」「突き抜けない」の同意の説明がなされ、学習内容が明確になった。

イ 形成的評価

練習やまとめ書き等そのつど自己評価したことは、児童の意欲につながった。

ウ 場の設定（学習スペース）

絵の具筆と、粘土の2グループで教室2箇所で活動させたが、児童の活発な活動からより広いスペースが必要だと感じた。今後は、2教室を使ったり、廊下等も活動スペースとして取り入れたりしていきたい。諸事情でスペースがない場合も考えられるので、いろいろな用具や、材料をセットした箱を事前に準備することが有効であると考えられる。一つの箱から絵の具筆も、粘土も取り出せるようにすることで、児童が自分の選択に従って学習をスムーズに進めることができる。児童たちとの日々の授業や語らいの中から、アイデアを豊富に出し合いたい。

(2) 方法を考えたり、選択したりして課題解決に取り組む。

ア 筆記用具の工夫

「右」を絵の具筆で書いた場合、一画目は黄色、二画目は青色で書くことにより交わる部分が緑に変わり、画と画が交わるという認識が高まった。粘土で文字を作ることで、つくこと・交わること、書き順を意識することができた。



イ 机間指導とチーム・ティーチング導入

チーム・ティーチングの導入で、発問、板書の分担により、効率よく学習できるようにした。

そして、一人一人の状況に応じて机間指導を行うことにより、児童に充実感を与えることができた。今後は座席カードやアドバイスカードを作成・活用し、児童理解・習熟度に応じた指導・評価などに一層役立てていきたい。

ウ 板書の構造化

児童の思考の下、板書を的確にすることが本時の目当ての習熟につながった。今後は、教材文字の特性から考え、児童にとって見やすく理解しやすい板書の構造化が必要である。

〈中学校第1学年の学習指導例〉

1 単元名 行書の学習—行書の筆使いと字形(1)

2 単元の目標

- (1) 楷書と行書を比較し、その違いを理解する。
- (2) 行書の特徴（点画の丸み、連続、点画の形や方向の変化）を理解して書く。
- (3) 点画の丸みや連続を理解し、筆使いと字形に注意して書く。
- (4) 点画の連続を理解し、筆使いと字形に注意して書く。
- (5) 毛筆の学習を生かし、点画の連続に注意して硬筆でも書く。

3 単元設定の理由

行書は、楷書に比べて「速書き」できる実用の書体として生まれたものである。点画を連続的に速く書くことから、線が曲線的になり、筆脈がはっきりと表れる。また、点画の形や大きさ、方向、筆順が変化したり、省略されることもある。このような行書の特徴の中で、初めて行書を学習する生徒にとって、「点画の連続」（A、横画から横画 B、左払いから横画 C、点から払い D、縦画から横画）は筆使いが難しいと思われる。実際、『月光』の教材で、点画の連続や丸みについて理解し、学習を進めたが、「点画の連続」の部分は、筆脈が意識されていない不自然な連続が多くみられた。『月光』で学習する〈A、横画から横画〉への連続は、「点画の連続」の基本となる筆使いである。筆脈を意識した運筆、横画の部分と筆脈が実画化した部分の筆圧の違い、筆脈のなかでの行書らしい始筆など基本的な筆使いを意識し、しっかり習得することは、他の「点画の連続」を学ぶための導入にもつながる。また、楷書の筆使いとの違いをはっきり意識させることもできる。そのため、〈A、横画から横画〉への連続を重点に取り上げる学習を設定し、筆使いの確認と充実を図り、さらに硬筆によって日常よく使う他の漢字にも広く応用できることをねらいとした。

また、『生活』は、上記A～Dの4種類の「点画の連続」が含まれた教材文字である。筆脈を意識した点画の連続の方法を習得するために、A～Dを4つの課題として設定し、提示した。生徒自身は、この4つの課題から習得できていない課題を自ら選択し、課題に合う教材文字を使って練習を進めることで「点画の連続」について主体的に取り組むこともねらいとする。

4 生徒の実態

本学級の「行書の学習」への取り組みの実態は、行書への興味・関心をもっている生徒は多いが、まだ学習時間も少ないため、運筆の加速や筆圧などの筆使いに慣れず、難しく感じている生徒も少なくない。

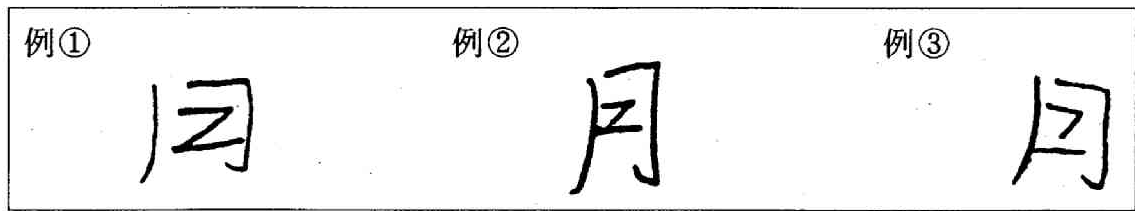
特に、前時に学習した『月光』における〈A、横画から横画〉への連続（「月」の3画～4画目）の実態は、

ア 横画の部分も筆脈が実画化した部分も同じ筆圧で書いてしまうため、横画から横画への連続がギザギザになっている。（例、①）

イ 「月」の4画目の始筆が楷書のような始筆になってしまい、筆脈からつながる「すべりこむような始筆」になっていない。（例、②）

ウ 筆脈が意識されていないため、連続の方向が不自然になっている。（例、③）

以上のような実態から、ア～ウをアドバイスカードの形で助言し、横画から横画への連続の方法を理解し、習得できるようにした。



5 研究主題との関連—学習指導の工夫

(1) 学習課題に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 教材文字の選択

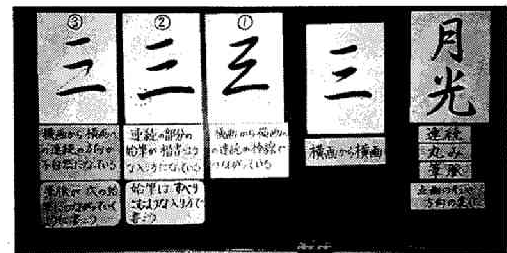
「横画から横画への連続」という共通課題のもと、前時の学習の自己評価から自分の教材文字を選択した。

イ 範書

『二』の範書を示し、行書の基本的な筆使い（運筆の加速、筆圧、始筆の入れ方）を視覚的に確認させることで、課題解決への意欲を高めることをねらいとした。

ウ 課題解決の方法の提示

『三』を使って「横画から横画への連続」の筆使いにおける問題点と正しい筆使いに直すための改善策を三つに絞り、提示した。その際、三色の色画用紙で色分けし、アドバイスカードとも連動させ、助言した。



課題の解決方法を提示した板書

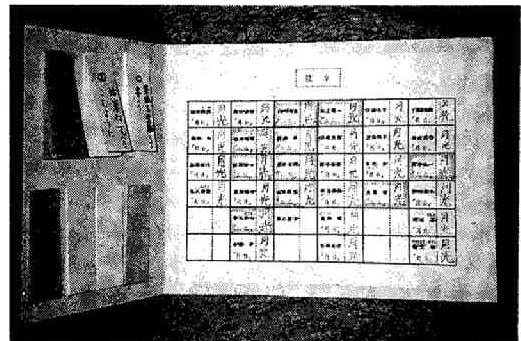
(2) 方法を考えたり、選択したりして課題解決に取り組む。

ア 練習用紙（毛筆）

教材文字ごとに練習用紙を数種類用意し、生徒が選択した段階から学習できるようにした。

イ ティーム・ティーチングでの授業—座席表の工夫

ティーム・ティーチングで授業を行ったが、授業の場面ごとにT₁とT₂の役割を明確にし、机間指導では、教材文字別に生徒を分担した。生徒の選択した教材文字と前時に学習した「月光」の自筆を入れた「座席表」を作り、アドバイスカードとともに持ち歩きながら助言できるようにした。



生徒の自筆を入れた座席表とアドバイスカード

(3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。

ア 学習プリント（硬筆）

毛筆で練習した行書の筆使いを使って、「横画から横画への連続」を含む他の漢字を硬筆で練習できる学習プリントを使って、硬筆の関連を図れるようにした。

イ 書写学習カード（自己評価カード）

本時の学習を振り返り、達成感をもつとともに、次の学習に向けて自分の課題を意識できるようにした。また、自己評価では、毛筆と硬筆の両面から評価できる項目だてを考慮した。

ウ 次時の予告

次時の教材文字『生活』で学習する「4つの連続」を示し、本時の学習内容との関連を図りながら、課題選択の学習への意識づけができるようにした。

(4) 書写で学んだことを日常生活に生かそうとする。

ア 小学校第6学年漢字配当表

日常よく使う漢字に生かすために、学年別漢字配当表を使い、「横画から横画への連続」を含む漢字を探す学習を取り入れた。

6 単元の学習計画（4時間扱い）

- (1) 点画の丸みや連続について理解し、筆使いや字形に注意して『月光』を書く。
- (2) 点画の連続（A、横画から横画）の筆使いを重点に学習し、硬筆にも生かして書く。
- (3) 点画の連続（B、左払いから横画 C、点から払い D、縦画から横画）を理解し、筆使いと字形に注意して『生活』を書く。
- (4) 点画の連続（A～D）の中で、自分が習得していない課題を見つける。そして、自分の課題にあった教材文字を選択し、学習する。



7 本時の学習活動（本時2／4）

(1) 教材 『月光』

(2) 目標

- ア 点画の連続〈A、横画から横画〉の筆使いを正しく理解し、書くことができる。
- イ 点画の連続〈A、横画から横画〉の筆使いを硬筆に生かして書くことができる。
- ウ 日常よく使う漢字の中に、「横画から横画への連続」を含む部分を探し、広く活用できることを知る。

(3) 展開

学習活動と内容	(T ₁) 支 援 (T ₂)		資料・教具			
<p>1 学習目標をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●前時に学習した行書の特徴を確認する。 ●横画から横画への連続の方法を重点に学習する。 <p>●『二』の範書や『三』の拡大文字を見ながら、「連続の筆使い」の注意点を知る。</p> <p>○筆脈の連続…運筆の加速、筆圧と連続を意識して書くことを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●教材文字『月光』を使って行書の特徴を想起させて、発言を引き出すようにする。 ○速く、丸く、点画の変化、連続などから「横画から横画への連続」を重点化させる。 ●範書にあわせて運筆の加速、筆圧、始筆の入れ方を説明する。(アドバイスカードと連動できるようにする。) 	<ul style="list-style-type: none"> ●拡大文字を黒板に貼る。 ●発言にあわせて拡大文字を指し示し、特徴カードを貼る。 ●『二』の範書をする。 ●『三』の拡大文字を貼る。(3種類) 	<p>拡大文字 『月光』 特徴カード 指示棒</p>			
	<p>アドバイスカード(3種類…3色の付箋紙)</p> <table border="1" data-bbox="612 1099 1225 1240"> <tr> <td>①筆脈を意識して書こう(黄色)</td> </tr> <tr> <td>②始筆はすべりこむように書こう(ピンク色)</td> </tr> <tr> <td>③筆脈が次の始筆につながるように書こう(水色)</td> </tr> </table> <p>※机間指導をしながら、生徒ひとりひとりに貼る</p>		①筆脈を意識して書こう(黄色)	②始筆はすべりこむように書こう(ピンク色)	③筆脈が次の始筆につながるように書こう(水色)	
①筆脈を意識して書こう(黄色)						
②始筆はすべりこむように書こう(ピンク色)						
③筆脈が次の始筆につながるように書こう(水色)						
<p>2 練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分が選択した練習用紙を使って、毛筆で練習する。(『二三』、『月日』) <p>3 硬筆で書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学習プリントの楷書の漢字を行書に直して書く。 ●横画から横画への連続の方法を硬筆に生かして書く。 <p>●小学校第6学年漢字配当表を使って、横画から横画への連続を含む漢字を探す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●『月日』を選択した生徒を支援する。 ●アドバイスカードを置きながら助言、筆使いになれていない生徒には、手を添えて支援する。 ●行書に直せなかったり、連続の方法を意識しないで書いている生徒の支援をする。 ●時間を計る。(3分) ●確認しあう生徒の疑問を受けたり、答えたりしながら机間指 	<ul style="list-style-type: none"> ●『二三』を選択した生徒を支援する。 ●学習プリント(硬筆)は、 ①連続の方法を使って、字形を整えて書く。 ②順番どおりに書く。 ③消しゴムは使わないことを伝える。 ●日常よく使う漢字に横画から横画への連続を生かせることを確認させる。 	<p>練習用紙(毛筆) アドバイスカード 学習プリント(硬筆) 小学校第6学年漢字配当表のプリント</p>			

<ul style="list-style-type: none"> ●友達同士で確認し合う。その後、正答プリントで確認する。 <p>4 評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学習カードを使って自己評価をする。 <p>5 次時の予告を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●『生活』の拡大文字を見て、他の点画の連続について知る。 	<p>導をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●正答プリントを配布する。 <ul style="list-style-type: none"> ●学習目標にそって評価できているか確認し、必要に応じて助言する。 <ul style="list-style-type: none"> ●点画の連続を示しながら知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●拡大文字を黒板にはる。4つの連続カードを貼る。 	<p>正答プリント</p> <p>タイマー 学習カード</p> <p>拡大文字 『生活』 連続カード</p>
--	---	--	--

(4) 評価

ア 筆脈を意識して、「横画から横画への連続」の筆使いを正しく理解し、書くことができたか。

イ 「横画から横画への連続」の方法（筆使い）を硬筆に生かして書くことができたか。

ウ 日常よく使う漢字にも「横画から横画への連続」を含む部分があることを知ることができたか。

8 本時の考察

(1) 学習に興味・関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりする。

ア 範書

(7) 範書によって、興味・関心を高めることにつながった。

(4) 範書と同時進行で筆使いの解説をしたが、この場面では「見て、学びとる」ことに集中させたほうがよかった。

イ 課題解決方法の提示

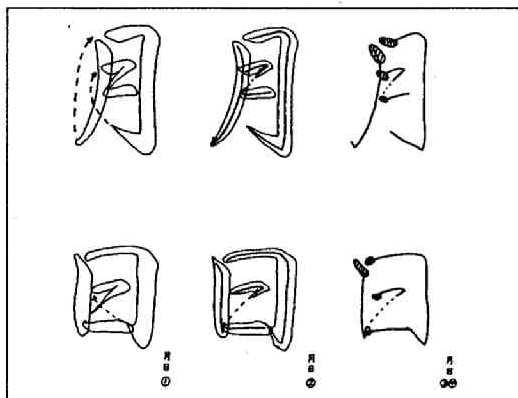
(7) 「横画から横画への連続」（『三』の拡大文字）の筆使いにおける問題点と正しい筆使いに直すための改善法を色分けし、アドバイスカードと連動させたことで、自分の課題を確認し、主体的に取り組むことができた。また、教師側も的確な助言を効果的に行うことができた。

(4) 「横画から横画への連続」の筆使いを『三』の拡大文字を使って重点化したことと、教材文字『月光』との関連性を意識させる説明が必要であった。

(2) 方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組む。

ア 練習用紙（毛筆）

選択した教材文字の練習をどの段階から始めたらいいか考え、自ら選択した練習用紙を使って学習することで、課題解決の意識を高め、主体的な取り組みができた。



イ ティーム・ティーチングでの授業一座席表の工夫

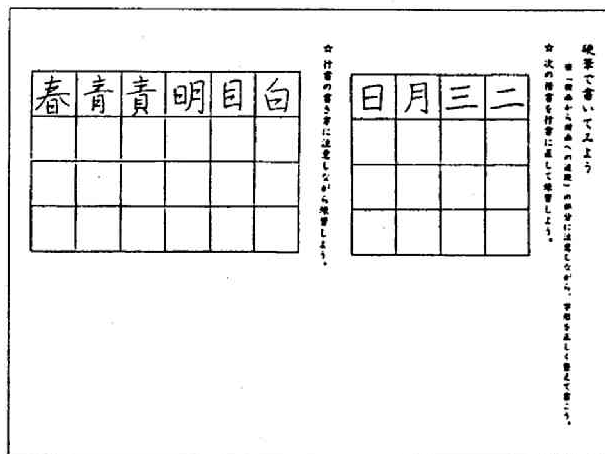
(7) 前時の『月光』の自筆を入れることやアドバイスカードによって、一人一人の生徒への助言を的確かつ効率的に行うことができた。

(イ) 生徒が選択した教材文字ごとに座席をまとめることも考えられた。机間指導の際、時間を有効に使い、一人一人の課題に応じた支援の充実につながる。

(3) 学習の成果を確認し、次の学習に生かそうとする。

ア 学習プリント（硬筆）

毛筆で練習した教材だけでなく、「横画から横画への連続」を含む他の漢字を書くことで硬毛の関連が図れるとともに、日常生活へ生かすための意識づけができた。



イ 書写学習カード（自己評価カード）

(7) 学習プリントと自己評価カードを表裏に印刷したことで、スムーズな学習活動につながった。

(イ) 毛筆と硬筆の両面から評価し、学習の成果を確認することができた。

(4) 書写で学んだことを日常生活に生かそうとする。

ア 小学校第6学年漢字配当表

(7) 「横画から横画への連続」を含む漢字を探す取り組みは、文字の他の要素との関連からやや難しい様子であった。取り組みの前に、本時の学習の中で扱った教材文字などを具体例とした説明が必要であった。

(イ) 時間を計って取り組むことでゲーム的な要素が加わり、楽しく取り組むことができた。

(ウ) 正答プリントを配る前に友達同士で確認しあうことで、新たな疑問や発見につながり、「点画の連続」や文字についての興味・関心を高めることができた。

IV 研究のまとめと今後の課題

今年度は、「一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習」の主題のもとに、学習課題・学習方法の選択に重点をおき研究を進めてきた。

小学校毛筆（高学年）・小学校硬筆（低学年）・中学校毛筆と研究授業も様々な角度から行い、発達段階に応じた学習課題・学習方法の選択のあり方を柱に次のように実践し研究してきた。

1 学習課題に興味関心をもち、自分の課題を選んだり見つけたりするための工夫

- (1) 空書きによる学習文字の確認により、筆順の理解を深めた。
- (2) 自由選択、課題選択を発達段階に応じて授業に取り入れ、習熟度によって学習を進めるよう工夫した。
- (3) 自らの課題を明確化するために、試し書きと教材文字の比較、チーム・ティーチングによる声かけ、学習カードの内容や構成の工夫をした。
- (4) 「とめ」「はね」「はらい」「○画目」などの用語を日常化することで、指導に際して児童・生徒の意識を焦点化することができた。

2 方法を考えたり選択したりして、課題解決に取り組むための工夫

- (1) 筆、鉛筆だけではなく、筆ペン、絵の具筆で、時には粘土を用い、興味・関心を持続させるとともに、一人一人の課題解決に有効的に取り組めるようにした。
- (2) 練習用紙を工夫し、自分で学習順序を選んで進めるようにした。
- (3) 課題ごとに座席をまとめたり、様々な用具を使ったコーナーを設けたりして、学習スペースの工夫を行った。
- (4) チーム・ティーチングで取り組み、役割を明確化し、途中で役割交換などをしながら、一人一人の支援に当たった。

3 学習成果を確認し、次の学習に生かすための工夫

- (1) 課題の再確認を行うとともに、まとめ書き、毛筆で練習したことと同じ課題の文字を硬筆で練習、学習カードを使って自己評価、相互評価をした。
- (2) 課題文字の学習後、同じ課題をもつ文字を今まで習った文字（学年別漢字配当表）から探してみるなど、発展学習の工夫を行った。

4 書写で学んだことを、日常生活に生かすための工夫

- (1) 読む相手を意識させ、書写で学んだことを生かして、学校や地域の行事のポスターやお知らせ、標語を書き、地域に掲示等をして文字環境を高めた。
- (2) 校内の約束事、スローガン、委員会の活動報告など、目的にあった用具を用い、丁寧に見やすく書いた。

以上のように実践を積み重ねた結果、次のような成果が得られた。

- 1 自分の課題を意識して教材文字や課題を選択して学習することにより、主体的に学習に取り組めるようになった。
- 2 硬筆、毛筆、半紙だけではなく、それぞれの課題に有効的な用具や用紙を用いたことに

よって、楽しく主体的に取り組み課題解決に役立った。

- 3 教室全体または、その他の場所を学習の場として使うことで、たくさんの課題解決のためのコーナーを設けることができた。課題解決に適した場を設定することで、一人一人が生き生きと活動し、進んで表現するようになった。また、学び合いもできるようになった。
- 4 子どもにとって選択するという活動は、自分の達成度により次の文字に進めるということで意欲が持続し、それが文字感覚を高めることにつながった。
- 5 ティーム・ティーチングにより、一人一人の課題選択にそった支援が可能になり、多面的な評価やかかわりができるようになり、文字感覚が高まった。
- 6 毛筆での学習後、硬筆で練習したり、同じ課題の文字を探す等によって、硬筆・毛筆の関連を図ることができた。
- 7 ポスターやお知らせ、おたよりなど、目的をもって書いたため、読み手を意識して正しく整った文字を書くことができるようになった。

以上多くの成果が得られた。児童・生徒たちは、従来行われていたような授業とは異なり、鉛筆、筆以外の用具を使って学習したり、自分の取り組みたい課題や方法を自分で選んで学習することで意欲的に楽しく活動することができた。また、課題を明確化した上での選択、方向性を示した上での選択により、自分の課題が明確になり、課題解決に主体的に取り組めるようになった。

しかし、次のような課題も残された。今後は、これらの課題の解決に努め、一人一人が楽しく主体的に活動できる書写学習を目指して、さらに高めていきたい。

- 1 選択する活動によって自分の意志を反映させることができ、生き生きと活動することができるようになった。しかし、児童・生徒がどんな選択をすると、文字感覚が高まり、文字を整えて書くことができるようになるのか発達段階を考えてとらえていく必要がある。
- 2 小学校低学年では30分、中学校では25分、75分といった授業時間の弾力的な運用や、選択して学習することのよさが十分発揮できるようなティーム・ティーチングのあり方を考える。また、ティーム・ティーチングの日常化を図るために、外部の協力者ともティーム・ティーチングを組むことも視野に入れて、どのような授業が構成できるか考えていく必要がある。